対話の意義と可能性
―徳山大学版 哲学カフェ「寺子屋」の実践―

寺田篤史　　中嶋克成
Both authors have contributed equally to this work.

キーワード：哲学カフェ　対話　寺子屋

1．はじめに

「哲学カフェ」及びそれに類する様々な対話の場の設定は、世界的に広がりを見せており、我々市民は現在、「哲学カフェ」に比較的容易に参加することができるようになってきている。この広がりは我々人間が生来「対話」（それが他者との対話か自己との内省的な対話かさておき）を要求していることに起因するのであろう。「対話」については「主体的・対話的で深い学び」[1)] を標榜する教育分野はもとより、福祉や医療などあらゆる分野で求められている。

「哲学カフェ」は1992年6月にマルク・ソーテがマレ地区に開設していた哲学相談所で偶発的に誕生したものとされている。ソーテは哲学相談所で実施されている「対話」についての様子を、自身が出演するラジオを通じて市民に紹介したところ、哲学の問答が行われていると誤解した市民が哲学相談所に集まったことが端緒とされている[2)]。ソーテが1998年に急逝した後も哲学カフェは広がり続け、1996年にソーテが来日した頃には、日本でもその萌芽が見られ、「この新たな哲学的実践は、間歇的に訪れる『哲学ブーム』とは異なり」[3)]、現在では世界中で開催されている。

2．本研究における「哲学カフェ」の意味と本研究の目的

本来であれば本研究の目的を論ずる前に、「哲学カフェ」について規定すべきであるが、哲学カフェについて積極的に規定するのは極めて困難である。「哲学カフェ」自体の様態が様々であり、かつ「哲学カフェ」について規定することは、ひいてはその背後にある「哲学」とは何かについて規定せねばならないからである[4)]。

そこで本研究では森本誠一（2013）のあげる、「哲学カフェ」は①「教師や生徒がいないこと」、②「参加者は平等」、③「専門知識は不要」、④「発言や参加を強要されない」、⑤「参加も退場も自由」[5)]の大別して5つの特徴を「哲学カフェ」の有する視座として、「寺子屋」について論じていくものとする。

1）文部科学省：新しい学習指導要領の考え方 －中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ－（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf、2019年12月30日閲覧）

2）マルク・ソーテ（堀内ゆかり訳）（1996）：ソクラテスのカフェ．紀伊園屋書店．

3）越門勝彦（2014）：哲学の共同実践としての対話 ―「哲学カフェ」の意義についての一考察―.人文社会科学論叢,23,pp.35-45.

4）「哲学カフェ」とは何かについての規定を試みている研究もある。例えば、村瀬 智之,戸谷 洋志, 木村史人, 竹内聖一（2017）:哲学カフェ×哲学教育－日本において、哲学カフェは哲学か？ 立正大学哲学会紀要（12）, pp.90-93. など。

5）森本誠一（2013）：公共的対話としての哲学カフェ . Humanitas,38,pp.35-46.

①「教師や生徒がいないこと」は、ファシリテーターと参加者の関係性についての視座である。「哲学カフェ」は教師が市民に対して教授するというような講義とは明確に異なり、参加者に対して何かを教えるようなものではない。したがって、教える―教えられるという関係を超えて十分な対話を促すには「教師や生徒がいないこと」は厳密に担保される必要がある。②「参加者は平等」は同じ平等でも参加者同士の関係性についての視座である。当然のことであるが、参加者自身がそれぞれ社会的なポジションを有している。社会的なポジションを明かした場合、他の参加者と上下関係が生じてしまうことがある。また、参加者同士に面識がある場合なども平等な対話が阻害されてしまうこともある。森本（2013）は「哲学カフェではむしろ所属や名前を言わないようにした方がよい。というのは、進行役と参加者、あるいは参加者同士が顔見知りで、あっても、お互いに名前で呼ばないようにしなければ、他の参加者は疎外感を感じて発言しづらくなるから」と指摘している。同様に、ファシリテーターと参加者、参加者と参加者の平等性を保つという意味で、「哲学カフェ」で③「専門知識は不要」となる。「哲学カフェ」で専門知識の伝授を行うと、そこに教える―教えられるの関係がどうしても生じてしまうため、参加者の対話の機会の平等性が阻害されてしまうおそれがあるためである（また、専門的な用語でしか説明できない事象は本当の意味で理解できていないともいえる）。したがって、テーマの選定においても事前の知識を要求するようなものは避ける必要がある。

また、「哲学カフェ」は自由に問いを発し合うことで自身の理解を深めたり、理解の枠組みを変えたりするものである。したがって、その参加の仕方は参加者自身に委ねられなければならない。森本の5つの視座にも④「発言や参加を強要されない」とあるように、参加者は発言を強要されない。哲学者がテキストと対話し自身の解釈を深めていくように、対話の対象は必ずしも対人間とは限らない。参加者は発言をしていないときにも、自己の内面と対話し、あるいは対話が発せられている場と対話することで自己の理解を深めている場合もあるためである。併せて、自由に問いを発せられる「場」の保障の観点から⑤「参加も退場も自由」という視座も極めて重要である。

本研究ではこの5つの視座を中心に、筆者らが実践した徳山大学版哲学カフェ「寺子屋」の事例から対話及び哲学カフェの意義について考察した。

3．実施の意図

筆者の一人である寺田は、徳山大学に着任した2016年度当初より同僚らから「哲学カフェ」を開くことを勧められており、また業務としてアクティブ・ラーニング推進を担当していることもあり哲学カフェのような自由な対話形式による学びのあり方に大いに興味を抱いていた。しかし、周南市ではすでに小川仁志先生（山口大学国際総合科学部教授）が定期的に哲学カフェを開いて人気を博しており、また筆者自身の不勉強もあって「とりあえずやってみる」という気にはなれなかった。先に述べた5つの視座からすれば、小川先生の哲学カフェに筆者が参加することで十分だからである。筆者らが「哲学カフェ」を開くのであれば、そこに独自の意義を見出す必要があると考えられた。

2019年に至っても「哲学カフェ」を開くべしという周囲の声は相変わらずであったが、

筆者の側ではそれまでの業務・授業における地域連携の経験が蓄積されていた。森本が掲げたような「哲学カフェ」の特徴にこだわらず、なお「哲学カフェ」のような一つのテーマについて語らう対話の場のイメージがしだいに出来つつあった。こうして、後述のように2019年10月に「てつがくカフェ寺子屋」を開くこととなったのである。

「てつがくカフェ寺子屋」の名称は妥協の産物である。できれば「哲学カフェ」の名称は外したかったため、はじめは筆者寺田の「寺」をとって「寺子屋」とすることを考えた。しかし、これだけでは催しのイメージがつきにくく、諦めて「てつがくカフェ寺子屋」とした。

「寺子屋」開催には杉岡茂弁護士（元徳山大学非常勤講師）や杉川茂氏（徳山大学COCコーディネーター）の強力なサポートがあった。大学外からの参加者は主として彼らによる呼びかけに応じていただいた地元経済人である。企業人をはじめとした市井の人々の「哲学」への関心の高さやこれが大学と地域の連携の端緒となりうることについての教示は開催を大きく後押しした。こうして様々な思惑・考えが絡みつき、「寺子屋」のコンセプトが出来上がった。

我々の「寺子屋」は一つのテーマについての自由な対話を行う場ではある。しかし、それが「哲学カフェ」であるかどうかにはこだわらない。我々は「寺子屋」を、大学人と学生および地域とを結びつける出会いの場としたかった。それゆえ、「寺子屋」は「哲学カフェ」としてはのっけから、また以下のいくつか手の点で「不純である」ことを引き受けることとなった。

まず、「寺子屋」が「参加者の哲学的な思索を深める場」であると同時に「大学人と学生および地域とを結びつける出会いの場」とすることのうちには、この活動が地域に向けた大学の一種のPR活動となる下心がある。大学所在地に居住していてもそこにどんな教員や学生がいるのか知らない住民は多い。地元経済人をはじめ、地域には教員や学生の持つ大学リソースへの関心は高い。徳山大学が「地域に輝く大学」としてますます地域との連携を図り地域貢献できるようになるための、地道な関係性づくりが意図されている。

そのため、②「参加者は平等」について、「寺子屋」では時に参加者は平等ではない。地域住人は、大学教員であるこの人が「誰なのか？」は重要な関心事である。また、地域の方は「〇〇学ではこのことをどう考えるのか？」「〇〇学の先生はどう考えるのか？」にも関心がある。それゆえ、一般的な話し合い活動と同様に自己開示のための自己紹介を行うし、発言者の属する特定の立場や専門的知見からの発言も積極的に許容している（甚だしくなれば考えるが未だそうした場面は生じていない）。一般参加者には③「専門知識は不要」④「発言や参加を強要されない」ではあるが、教員にはそうした知見や発言を求めることもある。また、ファシリテーターである寺田も場合によっては哲学・倫理学に関する知識を教授することもあり、①「教師や生徒がいないこと」が破れる場面もある。人をつなぐ目的のために、こうした点に「哲学カフェ」としての不純さがある。

一方で、⑤「参加も退場も自由」にいわれるような気楽さは「哲学カフェ」と同様に確保している。この点は、①～④が失われてもなお「自由な対話」のための最後の防衛線として必要であろう。

こうして、「専門・立場からの発言を厭わず」「自由に一つのテーマについて議論し考えを深める」「地域と大学をつなぐ場」という「寺子屋」

のコンセプトが明らかとなった。

4.「第１回目寺子屋」の内容

筆者らが運営発起人（中嶋）・ファシリテーター（寺田）となり、第1回「寺子屋」は2019年10月8日（火）11：00 ～ 13：00、徳山大学AL研究所会議室で開催された。参加者は、本学教員4名を含め計14名であった。キックオフである今回の「寺子屋」では、「大学でまなぶ」をテーマに設定し、地域の方々と教員とが語り合った。

企画運営発起人の中嶋から「寺子屋」の意図説明があった後、対話に先立ってファシリテーターの寺田によるビオラ演奏がなされた。「哲学カフェ」はコーヒーを片手に、時には音楽を聴きながら自由に対話し合う場であるため、ビオラ演奏によるアイスブレイクを行うことで初対面同士でも気軽に話せる空間（場）を作るようにとの意図である。

写真1.てつがくカフェ寺子屋チラシ

併せて提供されたコーヒーはベトナム産のロブスタ種の豆を使ったベトナムコーヒーが提供された。これは、「寺子屋」の意図の一つである地域の方と本学のリソースの接続という観点から、徳山大学2019年度前期地域ゼミ（中嶋）の下松市ホストタウン事業活性化の際に使用したベトナムコーヒーをゼミの概要説明とともに提供したものである。

また、写真2-2のように円卓（車座）に近い形で着席いただいている。円卓を利用した対話はは英国の伝説で、アーサー王が出席者に上下の別をつけないため、騎士と円卓を囲んで会議したことに始まる。この円卓会議に

写真2-1　ファシリテーター（寺田）による
ビオラ演奏①

出典ENHON11月号

写真2-2　ファシリテーター（寺田）による
ビオラ演奏②

より上下、席次の差別なく円卓を囲んで、懇談的に意見を交換することが促進されうる。例えばイギリスで、アイルランド自治法案をめぐって分裂したチェンバレン派とグラッドストン派の間で、自由党の再統一を目ざして1887年に行われた円卓会議や、オランダからインドネシアへ主権の移管を決めた1949年のハーグ円卓会議などがある。したがって、円卓に着席いただくことは、先に述べた「哲学カフェ」の特徴①「教師や生徒がいないこと」、②「参加者は平等」につながるといえる。先にも述べたように参加者はファシリテーター、運営発起人を含め、平等な「問いの共同体」である。この共同体の保障のためにあえて円卓に近い形での座席を配置しているのである。

まずは、自己紹介からスタートした。自己紹介等は避け自身の社会的ポジションを明らかにしないことで参加者の平等を図るという「哲学カフェ」の特徴②に対して、ここでは先述のように「寺子屋」は徳山大学のリソースと地域とを接続させることをも企図し、自己紹介も行っている。このように参加者が自身のポジションを明らかにした上で対話をスタートする場合、単なるポジショントークや教授関係に陥らないようファシリテーターには細心の注意が求められる。

写真3　提供されたベトナムコーヒー

以下、対話の展開を概観する（「　」は参加者らの発言）。

「大学で学ぶとは」について、最初に論点としてあがったのは「大学の教員は免許を持っていないこと」である。大学は小学校～高等学校までと異なり「教員免許」というものが存在せず「教育の」プロフェッショナルでは本来ない。「歴史的に見ると、大学はもともと同胞（研究者）を育てる場」であり、「(大学では）国の決め事なしに教育を展開できる」。高等学校までの教育は法的拘束力を持つ学習指導要領に教育内容を規定される一方、大学では「決め事」がなく、ある程度大学の自治に任されている。

また、「学び」と「教育」は必ずしも1対1の関係ではなく、「教育」によらないアルバイト等での「生活上の自立」や「地域を生かす」ことで「いつのまにか『学ぶ』」ということがありうる。大学は高等学校までと違い「自由な時間が多く」それを生かして、「(講義ではなく）自分で学ぶ」、「友達との関わりや対話の中から学ぶ」などの様々な学びがありうるという意見が出た（＝偶発的な学び)。この意見を受け、大学教育を受けた経験のある参加者の一人が「大学でやった授業は覚えていないが、大学に行ってよかったと思う。大学は勉強だけではない」と自己の経験を語られた。「教養だけではなくいわゆる生きる力」をつけさせることも「大学の役割」とのことであった。

これは、先の意見でも出た「同胞（研究者）を育てる場」という従来の「大学の役割」が変化していることの表れであり、他の参加者からも大学の役割について「学びを学生の次の展開に生かせるようにする」ことや「偶発的な学びを意図的に起こすことである」との意見が出た。

このような問題意識から、参加者から「大

学で学ぶ」ものとして「批判的思考」（クリティカルシンキング）ではないかという意見が出た。わが国では2012年、文部科学大臣平野博文が「社会の期待に応える教育改革の推進」で「批判的思考」を重視した改革を提唱しており、それが例えば2020年からの入試改革などにも影響している。その意味で「大学で学ぶ」ものの一つとして「批判的思考」が挙げられた。

一方で、「批判的思考」が世界経済フォーラム[6)]で2020年以降に必要とされるビジネススキルの第2位に選出されたこともあり、大学では「社会を学ぶことが重要で、専攻と仕事をしっかり意識して学ぶ」ことが重要とする意見や、「仕事をしっかり意識して学ぶ」ためには、「講義を聴くだけでは不十分」であるとの意見も見られた。この意見に対し、「社会＝職業と捉えるのはあまりに社会を小さくとらえているのではないか。地域、歴史、文化、哲学などの総体が社会である」との意見も見られた。

写真3.　てつがくカフェ「寺子屋」の様子
出典　EHON11月号

ここで挙げた以外にも様々な意見交換がみられた後に、それぞれの参加者が自身の考える「大学で学ぶとは」を一言述べ、閉会となった。やや冗長になるが下に引用する。

「大学で学ぶとは」
- 学生の世界が広がる。主体的に学べる学生とそうでない学生とで4年で大きく差がつく。
- 意図的な学びと偶発的な学びを適切に構成することで学生の「汎用的能力」を引き出す。
- 座学のイメージだったが色々な方向性があることに気づくことができた。
- 学生の気づきを促す。
- 学び方を学ぶ。自己世界のかえ方を学ぶ。
- 学びの自由度が極めて高い。外で活動する機会を保障することが大事。メンターの存在は重要である。
- 色々な体験・経験ができる。なりたい自分になるために自己に問いを発し続ける。

5．まとめ

今回、地域と大学の接続を企図した新しい形での（あるいは極めて不純な）「哲学カフェ」の試みとして、「寺子屋」の実践を行った。すでに「哲学カフェ」の実践は全国的にも広がっており（その内のどれほどが森本の挙げる特徴を有するきちんとした「哲学カフェ」として開かれているのかはわからないが）、当地周南市でも行われていた。地域と大学の接続というコンセプトは、「哲学カフェ」の理念を汚すものではあるが、「寺子屋」という存在の積

6）The 10 skills you need to thrive in the Fourth Industrial Revolution（https://www.weforum.org/agenda/2016/01/the-10-skills-you-need-to-thrive-in-the-fourth-industrial-revolution/、2019年12月30日閲覧）

極的意義はむしろこの点にこそある。

（本報告は初回のみだが）これまでの数回の実施の結果から、「自由に問いを発し合うことで自身の理解を深めたり、理解の枠組みを変えたりする」という「哲学カフェ」の意義について、「寺子屋」の試みはいまのところいささかも減じていない。また、教員が専門家の立場からも発言したりする点などについては、大いに成功しているように思われる。参加者に対して個別に感想を求めると、「大学にこういう先生がいることを初めて知った」という感想をいただくことができる。会の後には名刺交換も行われ、新たな地域連携のきっかけとなる予感が十分にあった。大学と地域の接続への「寺子屋」の寄与に関しては今後さらに会を重ねて検証し報告したい。